

ダニエル書 - 第三百十

アメリカ合衆国の預言的転換：第六の王国から三重連合へ

Jeff Pippenger

2024-03-11

アメリカ合衆国が近く施行される日曜法を執行するとき、聖書の預言における第六の王国であることをやめ、現代ローマの三重連合の三分の一へと移行する。日曜法を執行する大統領は最後の大統領となり、共和党の大統領である。これは二人の証人によって確立されている。

最初の共和党大統領であったエイブラハム・リンカーンは、1863年に奴隷解放宣言を『語った』が、それは地の獣の預言的歴史における『語り』の中間の道標であった。リンカーンが1863年に奴隷解放宣言を『語った』とき、彼は最初の共和党大統領であり、したがって最後の大統領の型を示している。エイブラハム・リンカーンは、地の獣の第一の期間の最後の道標であると同時に、第二の期間の最初の道標でもある。イエスは常に、初めによって終わりを示す。二つの期間のうち後の期間の終わりに、地の獣が竜のように語るとき、大統領は、リンカーンが型を示しているように、共和党の大統領となる。

最後の大統領が共和党の大統領であることの第二の証しは、1989年の「終わりの時」にレーガン政権下で始まった期間である。1989年から間もなく到来する日曜法に至る預言的期間は、508年から538年の歴史における、教皇ローマが王座に就くための準備の預言的期間によって表されてきた。538年に反キリストが権勢を得るためのその準備の預言的期間は、キリストの準備の30年、すなわち誕生から洗礼に至るまでの期間によって型示されていた。

反キリストには、キリストの三十年の準備を模倣した三十年の準備期間があった。キリストと反キリストの双方に三十年の準備期間があることは、間もなく到来する日曜法において致命的な傷が癒やされるための準備期間があることの二つの証しとなっている。その準備期間は1989年の終わりの時に始まった。ちょうど、キリストが誕生したときにその準備期間が到来し、それが彼の預言史における終わりの時を画したのと同様である。

最後の大統領に先立って、ダニエル書11章2節は、グローバリストの勢力を「扇動する」裕福な大統領に至るまで六人の大統領がいると教えている。その六人の大統領の最初は、共和党のロナルド・レーガンである。ロナルド・レーガンとエイブラハム・リンカーンが二人の証人となる。1863年の反乱の道標と、1989年に始まる大統領の系譜が、アメリカ合衆国の最後の大統領の特徴を特定する。

ロナルド・レーガンは第一の象徴であり、ゆえに最後のものをも示している。レーガンはかつてメディアのスターであり、民主党員から転向して共和党員となった人物だった。彼は挑発的な英語の使い方で知られていた。彼はユーモアのセンスでも知られていた。彼はプロテスタントであることを公言していたが、聖書の預言における反キリストと同盟を結んだとき、プロテスタントが何を意味するのかを真に理解していないことを示した。

彼は親米的で、政治的にもひるまなかった。彼の前任者は現代政治のその時代で最も無能な大統領であり、イスラム過激派の要求に屈していた。おそらく彼の発言のうち最も重要で、しかもそれを成し遂げたとして彼に功績が帰せられているのは、彼が「ゴルバチョフ氏、この壁を取り壊せ。」と言ったときである。

ドナルド・トランプは最後の象徴であり、ゆえに最初のものによって例証されている。トランプはかつてメディアのスターであり、民主党員だったが共和党に転向した人物でもある。彼は挑発的な英語の使い方でも知られている。彼はユーモアのセンスでも知られている。彼は自らプロテスタントだと公言しているが、プロテスタントが何を意味するのかを真に理解していないことを示してきた。そして、間もなくやって来る日曜法の際に、聖書の預言における反キリストと同盟を結ぶだろう。

彼は親米派で、政治的に臆するところがない。彼の前任者は、現代政治において最も無能な大統領だった。そして2024年に彼が再選されると、またしても現代政治における新たな最も無能な大統領が彼の前任者ということになる。いずれの場合も、彼の前任者はイスラム過激派の要求に屈したことで知られている。彼がこれまでに発した言葉の中で最も重要で、成し遂げたとして彼に功績が認められるに違いないのは、「壁を築け」だ。

これは、ジミー・カーター、バラク・フセイン・オバマ、ジョー・バイデンが大統領在任中に高い効果を発揮しなかったと主張するものではない。むしろ、彼らの有効性は、彼ら自身が遵守し保護すると宣誓したまさにその文書であるアメリカ合衆国憲法に謳われた原則を破壊するための働きに基づくものだったうえに、カーターがレーガンの当選までイスラムが人質を拘束することを許したという現実、オバマがイスラム世界への謝罪ツアーを行い、過激派イスラムの主要な銀行に少なくとも10億ドルの現金を与えたという事実、そしてバイデンのイスラムへの支持の経歴は挙げきれないほど長いという現実がある。

ロナルド・レーガンは、「鉄のカーテン」と呼ばれる象徴的な壁を打ち砕く働きを成し遂げ、1989年11月11日には、その霊的な勝利に文字通りの目印を付すかのように、ベルリンの壁が崩壊した。トランプは政教分離という象徴的な壁を取り払うだろう。そして第三の災いが、その出来事の文字通りの目印を与えるだろう。その出来事は、第三の災いにおけるイスラムの到来によって始まった十四万四千人の封印の期間を締めくくることになる。その到来は、封印の期間の霊的な働きが始まったことを示す文字通りの目印を与えた。2023年10月7日は、十四万四千人の封印の期間における三つの文字通りの歴史的目印の中間点となった。

その封印の歴史のさなかに、ロナルド・レーガン以来6番目の大統領が、底知れぬ淵からの獣によって象徴的な政治的暗殺の犠牲となった。封印の時期のはじめにおける底知れぬ淵からの獣はイスラム教であり、ムハンマドを表す偽預言者の象徴であった。封印の時期の終わりににおける底知れぬ淵からの獣はカトリックの海の獣であり、その致命的な傷は癒される。封印の時期の中ほどに上ってくる底知れぬ淵からの獣は無神論の獣、すなわち竜である。封印の時期の中ほどに、底知れぬ淵からの竜の獣が黙示録第十一章の二人の証人を打ち殺す。

アメリカ南北戦争における奴隷制支持の民主党のドラゴン派閥は、初の共和党大統領を文字通り殺害した。南北戦争は1865年4月9日に公式に終結し、リンカーンはその一週間後の15日に亡くなったが、その前日に銃撃されていた。戦争は第七日安息日に終わり、リンカーンは第七日安息日に亡くなった。

富と権力を持つ大統領に対して覚醒（扇動）されたグローバリストたちは、2020年11月3日に政治的暗殺を成し遂げた。底なしの淵から出てきたその獣は、最初の共和党大統領の文字通りの死を典型として、最後の共和党大統領を象徴的に殺した竜の獣を表していた。神の御言葉は、世界が彼の死を喜んだ後、彼が自らの足で立ち上がると告げている。今は2024年で、彼に対して投げられているあらゆる法廷闘争、嘘、プロパガンダ、資金にもかかわらず、トランプが蘇ったことは明らかである。

アメリカ合衆国で顕在化し、ひいては世界でも同じ論争が起こることを予示するその論争のさなかに、天から後の雨に表される神の力が降ってくる時期に、地下からサタン的な力が湧き上がってくるだろう。

2001年9月11日から、米国で間もなく到来する日曜法に至るまでの歴史において、第三の災いのイスラムが煙となって底なしの淵から上ってきたが、それはその歴史の始まりにおける燃えさかる建物の煙を表していた。2016年には、グローバリストの共産主義的なウォーク主義が二人の証人を殺すために台頭した。そして間もなく到来する日曜法のとて、七つに属する八番目の獣となる教皇権が、その致命的な傷が癒されるにつれて、地の王座にのぼり詰めるだろう。

上からの力として後の雨が降っている時代に、下から来る力を表す獣たちは、預言的な「真理」を表している。最初に煙のように立ちのぼるのは第三のわざわいのイスラム教であり、黙示録18章の第一の音が響くときで、後の雨が「測られる」ことが始まるときにそれは立ちのぼる。最後に立ちのぼる獣はローマ教皇制であり、黙示録18章の第二の音が響くときで、後の雨が量りなしに注がれているときにそれは立ちのぼる。

最初のもは最後のものを象徴しており、真ん中で上ってくる獣は、2020年に二人の証人を殺した無神論的グローバリズムの獣である。一人の証人はプロテスタントの角で、もう一人は共和党の角であった。無神論の獣に結びつく反逆と無政府状態はヘブライ語アルファベットの13番目の文字で表されており、そしてその底知れぬ淵からの獣は、ヘブライ語の「真理」という語の定義を形作る、底知れぬ淵からの最初の獣と最後の獣のあいだに現れた。たとえそれが、天の力が上から来る時に、下から来るサタン的な力を特定する真理であるとしても。

二人の証人が殺されてから三日半後、「中間の声」が響き始めた。それは「荒野で叫ぶ者の声」であった。その声は、契約の使者のために道を備える使者の声の「終わり」であり、また、男女をカルメル山へ呼び集めるエリヤの声の始まりであった。

兄弟姉妹よ、いまこの時の重要さ、いま起こっている出来事の意義にあなたがたを目覚めさせる言葉を語る事ができればと切に願う。私は、宗教の自由を制限しようとする攻勢的な動きが今まさに進められていることを指し示す。神の聖別された記念は

打ち壊され、その代わりに、いかなる聖性も持たない偽りの安息日が世界の前に掲げられている。そして、暗黒の勢力が下から諸力をかき立てている一方で、天の主なる神は上から力をお送りになり、御自身の生ける器たちを奮い立たせて天の律法を高く掲げさせ、この緊急事態に対処しておられる。今、まさに今こそ、外国で働く時である。宗教の自由の地アメリカが、良心を強制し、人々に偽りの安息日を尊ばせるために教皇制と連合するようになると、地球上のあらゆる国の人々が、その模範に倣うよう導かれるであろう。私たちの人々は、身近にある手段と資源を用いて力の限りを尽くし、警告のメッセージを広めることに、なお半ばも目覚めていない。

「天の主なる神は、警告を与えるために見張り人を遣わされるまでは、不服従と背きのゆえに世にその裁きを下されない。メッセージがいつそう明確に宣べ伝えられるまでは、猶予の時を閉じられない。神の律法は高く掲げられなければならない。その要求は、その真実で聖なる性格のままに提示され、民が真理に賛するか否かを決断できるようにしなければならない。それでもなお、この働きは義のうちに速やかに成就される。キリストの義のメッセージは、主の道を備えるために、地の果てから果てへと鳴り響かなければならない。これこそが神の栄光であり、第三天使の働きを締めくくるものである。」『証言』第6巻、18、19ページ。

2023年7月末に始まったメッセージは、今や『はっきりと宣言し』、『警告し』、『この時の重要性、今起きている出来事の意義』を明らかにしている。『下から諸要素をかき立てている』『闇の勢力』を明確に指し示し、また『天の主なる神』が2001年9月11日に『上から力を送る』ことを始められたことも、はっきりと示している。『地の果てから地の果てまで』『キリストの義のメッセージ』を『響かせている』。今こそ『この時の重要性』に『目を覚ます』べき時である。というのも、神は今や『不従順と背きに対するご自身の裁きを世界に下す』ことを始めようとしておられるからである。

ダニエル書11章40節において終わりの時を1989年とする預言の線は、同じ40節で終わりの時を1798年とする内的な預言の線に対比して、外的歴史を強調している。その節で1989年から始まる預言的歴史は、教皇ローマの致命的な傷が癒やされる三段階の過程を明らかにしている。1989年から、まもなく来る日曜法においてその傷が癒やされるまでの期間は、特定の預言的期間を表している。ダニエル書11章2節は、1989年のロナルド・レーガンから始まるアメリカ合衆国大統領たちの預言的役割を示すことによって、第二の線を付け加えている。日曜法へと至るその預言的期間には第二の証人があり、それは508年から538年にかけて遂行された三十年の準備である。そのとき教皇制は初めて王座に就き、まさにその年に日曜法を制定した。

キリストは三十歳のときに洗礼を受け、三年半の宣教を始められた。教皇制はキリストのサタンのまがい物であり、508年から538年までの三十年間は、キリストが洗礼に至るまでの最初の三十年を模した偽物である。さらに、キリストの三年半の宣教は、教皇制が世界にその死の務めを提示した預言的な三年半によって、いのちの宣教のまがい物として模倣された。

その宣教の終わりに、彼は死に、第七日に墓の中で安息し、その後に復活した。1798年、預言的な三年半にわたる教皇制のサタンの働きが終わりに、教皇制は致命的な傷を受け、その後、象徴的な七十年間忘れ去られ、七つに属する第八として復活するに至る。キ

リストは週の第一日に復活されたが、順序からいえば第一日は「第八日」であり、それはキリストが創造された「七日間」に属している。八という数は「復活」を表し、そして教皇制は復活する。というのも、教皇制は聖書の預言に登場する諸王国の中で、致命的な傷を受けると特定されている唯一の王国だからである。

パウロは、神が古代イスラエルを紅海を通らせたとき、洗礼が象徴的に表されていたと指摘している。

さて、兄弟たちよ、わたしは、あなたがたに次のことを知らないでいてほしくない。わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜けた。そして皆、雲の中と海の中でモーセに属するバプテスマを受けた。コリント人への第一の手紙 10章1、2節

霊的イスラエルに対する洗礼の儀式は、血統上のイスラエルに対する割礼の儀式に取って代わった。割礼は第八日に行われるべきであった。したがってキリストは、第八日、すなわち七日周期における第八の日に復活された。そして、教皇制が「七に属する第八」として復活するとき、それはキリストの系譜に対するサタン的な並行となる。教皇制が即位するための準備の三十年は、キリストが洗礼と公生涯と死に備えて過ごした三十年によって型示されていた。それら二つの系譜はともに、聖書の預言における第六の王国の死へと至る期間を指し示している。両方の系譜は、地の獣の最後の期間を表している。キリストの系譜においては、キリストの誕生がその歴史にとっての「終わりの時」を画した。

このように、四つのラインがある。四十節における1989年の「終わりの時」から、四十一節の「日曜法」まで。十一章二節における大統領たちの紹介、そしてキリストと反キリストの双方に関する準備の三十年間。キリストの三十年間は、キリストのラインにおける「終わりの時」、すなわちその誕生によって印づけられた時点から始まった。1798年の「終わりの時」は、文字どおりのバビロンにおける文字どおりのイスラエルの七十年の捕囚の終わりによって型で示されていた。ゆえに、ダニエル書11章2節はダリウスから始まる。というのも、ダリウスはバビロンの陥落時に即位したからである。1989年は四十節における「終わりの時」であり、ダニエル書11章2節もまた「終わりの時」であり、そしてキリストの準備の三十年間は「終わりの時」から始まった。これら四つのラインのうち三つは、始まりの目印としての「終わりの時」が容易に示されている。

第一の天使の運動と第三の天使の運動における二つの二百二十年の期間は、二百二十を人間と神性の結びつきの象徴として示している。1776年に始まったこの二百二十年の象徴的な結びつきは、1996年へとつながった。

その期間は、ミラー派の歴史における1611年から1831年までの220年間によって特徴づけられていた。1776年の独立宣言から、地の獣が聖書の預言における第六の王国として王位に就いた1798年までの期間は、1996年に締めくくられた220年の中の三つの道標のうち最初の二つを表している。

1776年から1798年は、聖書預言における第六の王国が権勢を得るに至る時期を示しており、したがってキリストと反キリストの三十年間の準備期間と一致する。地の獣が権勢を得る前の時期は、七つに属する第八の獣である三重連合が権勢を得る前の時期を表している。七つに属する第八の獣とは、教皇制が世界を支配する第二にして最後の現れである

. 教皇制が世界を支配した最初の現れにおいては、三十年の準備期間があった。

線に線を重ね、1989年から日曜法に至る歴史、538年に至る三十年間の歴史、キリストの洗礼に至る三十年間の歴史、ロナルド・レーガンに始まり日曜法に至るダニエル書11章2節の歴史、そして1776年から1798年までの歴史は、いずれも終わりの時代における同じ歴史を表している。この事実を明確に理解することが不可欠である。というのも、1776年に始まり1798年に至る歴史こそが、すべての線を一つにまとめて明瞭にする線だからである。

黙示録13章の地から上って来る獣の終幕期に当たるその預言的歴史の流れにおいては、真のプロテスタンティズムの角によって表される神の民に向けられた内部の流れがあり、共和主義の角によって表される外部の流れもある。両方の角には、預言が扱う二重の闘争と論争が存在する。私たちは、1989年から日曜法に至る歴史の中に現れる、竜、獣、偽預言者、そしてイスラムの預言的要素を特定してきた。

竜の預言的な特質とは、彼が偽りの父であり、殺人者であり、天においてそうであったのと同様に、地上における秘密の陰謀の首謀者であるということである。彼の宗教は心霊主義である。彼は今日「lawfare」と呼ばれるものの旗手であり、不敬虔な弁護士、私たちの兄弟たちを訴える者である。天の法廷でヨブの従順と信仰をめぐって論争したとき、モーセの体をめぐって争ったとき、さらにゼカリヤ書第3章でヨシュアから汚れた衣を取り除くキリストの働きについて論争したときと同じである。彼は諸国を支配する者であり、神として自らを高ぶらせる者である。

その獣の宗教はカトリックであり、彼女は、神のことばにまさって従うべきものだと自分の追従者たちに信じ込ませる伝統や慣習を通して世界を欺く女である。彼女は自らの魔術によって世界を欺くが、これは黙示録18章23節ではギリシア語のpharmakeiaであり、「医薬品」を意味する。彼女は地の王たちと姦淫を行う者である。彼女は、死んだが再び生きておられる方の偽物である。彼女は忘れられ、やがて思い出される者であり、七つに属する八番目である。彼女は、アメリカ合衆国が彼女の像を造り、また彼女に対する像を造る獣である。

偽預言者は背教したプロテスタンティズムであり、これは神のことばが否定する何者かであると僭称し、しかも神のことばを否むがゆえに、神のことばが与える力を欠いている。神のことばの力がなければ、なおも増上慢に自分たちが神の民であると主張する教会や民は、論理の帰結として、神の業を行っているかのように装うために世俗の権力に依存せざるを得なくなる。背教したプロテスタンティズムは、イゼベルとヘロデヤのために欺きの踊りを提供するバアルとアシュタロテの預言者であり、同時にヘロデヤの娘サロメでもある。

これら三つの勢力は三重の同盟として結びつくが、実際には互いに憎み合っている。彼らが互いに対立しているという事実を理解しなければ、十人の王（国際連合）がどのようにして自分たちの王国を教皇権に与えることに同意し、しかも同じ章で彼女の肉を食らい、火で焼き尽くすとされているのかを理解することはできない。これらの勢力間の対立は、神の預言を学ぶ者たちに教えられるべきである。

イスラムは第七のラッパであり、第三の災いとして、神が現代のバビロンに裁きを下すために用いる裁きの器である。これは、第一から第四のラッパが西方の異教ローマに裁きをもたらし、第五と第六のラッパが教皇ローマと東方の異教ローマに裁きをもたらしたのと同様である。

次の記事でこの研究を続けます。

この特別な重要性を帯びた時代にあつて、神の群れの牧者たちは、人々に、靈的な勢力の間で争いが起こっていることを教えるべきである。いま宗教界に見られるような感情の激しさを生み出しているのは、人間ではない。サタンの靈的な会堂から出た力が、世界の宗教的諸要素に浸透し、サタンが得た優位をさらに押し進めるために、人々を決然たる行動へと駆り立てている。すなわち、神の言葉を自らの導きとし、教義の唯一の土台とする者たちに対する断固たる戦いへと宗教界を導いているのである。サタンは今や、エホバの律法の拘束的な要求、ことに天と地の創造主が誰であるかを明らかにする第四戒に立ち向かうため、用いることのできるあらゆる原理とあらゆる力を総動員しようと、巧妙をきわめた努力を傾けている。

罪の人は時と律法を変えようと考えてきた。しかし、彼はそれを成し遂げたのか。これこそが重大な問題である。ローマと、その不義の杯を飲んだすべての教会は、時と律法を変えようとする事において、神よりも自らを高く掲げ、神の大いなる記念である第七日安息日を打ち壊してしまった。安息日は、神が六日のうちに世界を創造し、第七日に休まれた神の力を示すしるしとして立っているはずであった。「それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖別された」。それは、神が創造して行われたすべてのわざをやめ、この日に休まれたからである。大いなる欺く者の巧妙な働きの目的は、神に取って代わることにあつた。彼は時と律法を変えようとするその努力において、神に敵対し、神の上に立つ権力を維持しようとして働いてきた。

ここに大いなる争点がある。ここに二つの大いなる勢力が相対している—神の君、イエス・キリストと、闇の君、サタンである。ここに公然の闘争が起こる。世にはただ二つの陣営しかなく、人間はだれもがこの二つの旗印のいずれかのもとに身を置くことになる—闇の君の旗印か、イエス・キリストの旗印かである。

神はご自分の靈によって、忠実で真実な子らに靈感を与える。聖靈は神の代表であり、この世界で力強く働いて、忠実で真実な者たちを束にまとめ、主の倉に収める。サタンもまた、激しく活動して、小麦の間から自分の毒麦を束にまとめて集めている。

キリストの真の大使であるすべての者の教えは、今やこの上なく厳粛で重大な事柄である。私たちは、永遠に関わる最終の決定が下されるまで決して終わらない戦いに従事している。イエスのすべての弟子は思い起こすべきである。『私たちの格闘は血肉に対するのではなく、もろもろの支配、もろもろの権威、この世の闇の支配者、高い所にいる悪の靈どもに対するのである。』ああ、この闘いには永遠の利害がかかっており、この問題に臨むにあつては、うわべだけの働きや安直な経験で済ませてはならない。『主は、敬虔な者を誘惑から救い出す方法を知っておられ、また、不義な者を罰を受けさせるために裁きの日まで留め置くことも知っておられる。……しかるに、力と権能において大いなる御使いたちでさえ、主の御前で彼らに対してののしりの訴えを持ち出すことはしない。』総会日刊公報、1895年3月4日。